

鹿児島県の経済が分かる情報誌

ker

MONTHLY ECONOMIC MAGAZINE

9 2025
月号
Vol.426



鹿児島を動かす人々

PEOPLE in Kagoshima

東シナ海の小さな島ブランド株式会社
代表取締役

山下 賢太氏

調査レポート

経済は夜動く
～ナイトタイムエコノミー最前線～

トピックス

地域の資源に輝きを
～五社会 南薩視察記～

KER
The Kyushu Economic Research Institute
株式会社 九州経済研究所

CONTENTS

- 01 コラム
うなぎの寝床 Vol.57 P.N. 右筆
- 02 南の風
独立行政法人 奄美群島振興開発基金
理事長 藤井 隆 氏
- 04 PEOPLE in Kagoshima 鹿児島を動かす人々
Episode 18
東シナ海の小さな島ブランド株式会社 代表取締役

山下 賢太 氏

- 10 調査レポート
経済は夜動く
～ナイトタイムエコノミー最前線～

- 16 トピックス
地域の資源に輝きを
～五社会 南薩視察記～

- 18 そんな数字ないな? 57歳1カ月

- 19 Monthly Trend
県産一番茶、生産量日本一!
～てん茶の輸出でさらなる飛躍を～

経営のヒント

- 20 ビジネスQ&A【人事・労務】
22 台北だより

- 24 経済概況
- 30 今月の注目指標 高校新卒予定者の求人倍率
- 31 経済日誌
- 34 アートに触れる VOL.63 比地岡 ヨウコ 氏
- 36 湯ネスコ
- 38 日々の中から楽しみを… Vol.15
タレント 田上 真澄 氏

ご案内

- 40 志学館大学 おとなの教養講座2025
42 デジタルの日2025 in 鹿児島

- 43 BOOKs 今月の1冊・8月のBEST10
44 次号予告・編集者のつぶやき

今月の
1本

P9:鹿児島本土から西に約30km。東シナ海に浮かぶ甑島列島は、上甑島、中甑島、下甑島と縦に連なる3つの島で構成されている。



P13:リアカー屋台

KER刊行誌が電子BOOKでも読めます。

電子BOOKは
こちらから



当研究所
ホームページ
はこちらから



URL : <https://www.ker.co.jp>

表紙写真:薩摩川内市 甑島のアコウの樹。この樹には昔から精霊が宿ると言われている。

- マンスリーデータ「全国・鹿児島県の経済指標、宮崎県・熊本県・福岡県・沖縄県の経済指標」につきましては、当研究所ホームページに掲載しておりますので、ご活用ください。
- 本誌の内容、テキスト、画像等の無断転載・無断使用を固く禁じます。落丁本・乱丁本はお取り替えます。

限界集落を トツプランナーに

鹿児島本土から西に約30^{キロ}。東シナ海に浮かぶ甑島列島は、上甑島、中甑島、下甑島と縦に連なる3つの島で構成されている。古くからキビナゴ漁が盛んで、2020年には3つの島をつなぐ甑大橋の開通が全国ニュースで取り上げられたことも記憶に新しい。かつて漁業を中心に栄えたこの島も過疎化と人口減少に悩まされている。島の人口は3728人（2023年9月「住民基本台帳」）。50年前の3割近くになった。高齢化による働き手不足や空き家の増加など、さまざまな課題が山積している。そんな小さな島を拠点とする東シナ海の小さな島ブランド株式会社では、若い移住スタッフがいきいきと働いている。代表取締役の山下賢太さんに、島での取り組みと今後について話を聞いた。

山下 賢太

YAMASHITA KENTA

1985年生まれ

鹿児島県薩摩川内市上甑島（旧薩摩郡里村）出身。京都造形芸術大学環境デザイン学科卒業後、京都の布小物製造会社への就職を経て帰島。東シナ海の小さな島ブランド株式会社を設立し、「山下商店甑島本店」「FUJIYA HOSTEL」「コシキアラス」「niolass 甑島」「オソノベーカー」などを開業。2021年には島守株式会社を設立し、空き家や遊休不動産などの保守管理運用事業も手掛ける。一方で、発起人として鹿児島離島文化経済圏をプロデュースし、甑島地域雇用移住対策協議会の理事を務めるなど、地域資源が循環する幸せなモノ・コトづくりに尽力している。

かつての原風景が 島の未来を守る原動力

いつも頭の片隅に忘れられない風景がある。それは東シナ海に浮かぶ小さな島の港町。港の前に大きなアコウの樹がそびえ、小道を挟んだ向かい側には破けた網を繕う漁師たちの小屋と小さな畑が広がる。朝は漁を終えた船が次々と帰港し、網を担ぐ漁師たちの威勢のいい声が聞こえる。夕暮れ時にはアコウの木陰に人が集まり、夕涼みをしながらベンチ

に座って井戸端会議が始まる。「○○さんは最近来ないね」「元気がなかったよ」。そんな何気ないやりとりの中に、互いを思いやる心と助け合いの精神が息づいていた。夜、アコウの樹の前で花火をするのがこの村で育った子どもたちの夏の風物詩だった。

そんな島の住民にとって当たり前の風景が今はもうない。水質改善を理由に石積みの防波堤は撤去され、埋め立て工事ではアコウの樹も姿を消した。そのころを境に人が減り、寄り合いの場も、かつて

の賑わいも失われていった。そんな島の現実に背を向けず島の未来を見つめる人がいる。東シナ海の小さな島ブランド株式会社（通称「アイランドカンパニー」）代表取締役の山下賢太さんは、かつて日常だった島の風景を見て育った。

彼が島の変化を知ったのは、高校3年生の時だった。甕島には高校がないため多くの子どもたちは高校進学を機に島を離れる。春休みに島へ久しぶりに帰省した山下さんは、アコウの樹のない光景を見て愕然とした。幼いころ、祖母に手を

引かれて連れて行ってもらったベンチも消えていた。この時に込み上げてきた喪失感と悔しさ――。その思いが、山下さんを過去と向き合わせ、島の未来を守る原動力になっている。

甕島らしさを取り戻すために 多岐にわたって事業を展開

島のかつての風景を守るために、山下さんが設立したアイランドカンパニーは、島内で多岐にわたる事業を展開して



「島にあるものは街並みも道もすべてに意味がある。過去の文脈を理解しながら50年、100年先まで見据えた地域づくりに挑戦したい」と語る山下さん



山下商店甕島本店：2013年開業。築100年を超える古民家を改修し、九州産大豆と100%海水にがりにこだわった豆腐を製造している



オソノベーカリー：2021年開業。甕島初のパン屋として平日の朝は焼きたてのパンと淹れたてのコーヒー、週末はモーニングやランチを提供する



コシキテラス：2016年開業。島の食材をふんだんに使用したランチやドリンク、スイーツが楽しめるほか、お土産コーナーにはご当地品が並ぶ

いる。その始まりは1軒の空き家だった。この古民家を改修し、国産大豆にこだわった手作り豆腐を製造する「山下商店」を開業した。ラッパを鳴らしながら販売して回る豆腐屋の光景が島によりがえった。すると、人が集まる場所にしてほしいと閉鎖された中甕港ターミナル跡地の再開発を任された。集落の高齢者と共に商品やメニューを考案し、ランチやカフェ、土産品を提供する複合施設「コシキテラス」として生まれ変わった。

空き家だった屋敷を解体予定の民家からもらった建具で再生した「オソノベーカリー」は、パンと週末食堂として開業した。山下さんが考えたのは、この

土地に暮らす人たちの豊かさが増す場所づくりである。ここでは週末だけモーニングやランチを提供し、平日の午後は地域の人たちの憩いの場になっている。営業時間以外は、地域の人に無償で開放している。唄や踊りを楽しむ高齢者クラブが利用したり、非常時には発電機を備えた避難所にもなったりする。

アイランドカンパニーは店舗で作った出来立ての豆腐やパン、加工品を詰め込んで、豆腐屋のラッパを鳴らしながら甕島内の14エリアを回っている。販売するのは限界集落と呼ばれる周囲に一軒も店がないエリア。いつもの決まった場所を訪れるとラッパを鳴らす前から人

だかりができていく。待ち時間は人と人が顔を合わせ、寄り合える時間だ。そうした時間こそが、この島に残すべき風景だった。アイランドカンパニーは、地域コミュニティを守りながら島民の暮らしを支える食のインフラを担っている。

観光分野においてもその姿勢は変わらない。古くからの民宿を引き継ぎリニューアルした「FUIJIA HOSTEL」は、島らしさを体験できるツアーを企画することで売り上げを2倍以上に伸ばした。中長期滞在者向けの宿泊施設「niclass（ニクラス）甕島」は、玉石と砂で積まれた昔な

がらの石垣を再現し、島の日常に溶け込む宿泊施設として人気を集めている。山下さんは言う。「観光客の要求に応えることばかり考えていては、島らしさを失い島の人が親切に接する余裕もなくなる」。他の地域に比べ観光推進で後発だった甕島で観光事業を手掛けるにあたって、山下さんは多くの観光先進地を見て回った。一部の観光地では観光客中心のやり方で、その土地の魅力が失われ、疲弊する地域の人たちを見てきた。そうならないために、村の景観や暮らし、人の営みを守りながら進める観光を貫いている。観光の主役は、あくまでもこの島に暮らす人たちだ。島の日常を

守ることが、非日常を味わいたい観光客の満足につながると信じている。

アイランドカンパニーは「懐かしい未来の風景を」のミッションを掲げている。失われていく古き良きものに光を当て、その土地らしさを取り戻すために、背伸びすることなくありのままの姿で観光客を招き入れている。

高齢化地域を守るために 新たな地域づくりに挑戦

山下さんが生まれ育ち、今も拠点としている甌島は、この10年で人口の3割が



FUJIYA HOSTEL：2018年に島の日常に渡す小さな島宿として再出発。宿泊者は山下商店の豆腐づくり見学ツアーができる



niclass 甌島：2021年オープン。西の浜海岸の目の前の好立地に古くからのまち並みに合わせた造りの建屋。島で暮らすような旅を存分に味わえる

るとも言われている。だからこそ今の甌島の課題を乗り越えることが日本全体の未来を切り開くモデルケースになるといえる。

人口の半分以上が高齢者となった集落を限界集落という言葉で表現されるが、山下さんは甌島が限界を迎えたわけではないと断言する。

「高度経済成長を前提に作られた今の社会システムでは限界といえるかもしれない。しかし、これからの人口減少に合わせた社会システムを作り上げたらトップランナーになる」。

現在、アイランドカンパニーでは島内

の集落で実験的にいろいろな活動に取り組んでいる。特に注目すべき取り組みが、山下商店のある里町での徒歩圏内で暮らせるコミュニティづくりだ。このエリアの半径400m以内で生活に必要なコトモノをすべてまかなえるコミュニティが構築されつつある。狭い範囲にいろいろな店を作るとは効率だけを見ているように映るかもしれない。だが、車の運転ができない高齢者にとっては、徒歩で移動できない場所に必要なお店があっても意味がない。今は若くてもやがては誰もが年を取る。だからこそ若者も高齢者も関係なく、みんなが幸せを享受できる地域づくりを進めている。そのため車社会になる前の江戸時代や明治時代を参考に、この土地らしさと向き合っている。

山下さんは、これからの子どもたちが自分で暮らしたい場所を選び、自由に好きな動き方を選択できる時代がくると信じている。島に空き家が増えているが、それを問題と捉えていない。新しく移住してくる人が店を開きコミュニティの場を作るために必要な余白であり、未来の可能性を秘めた関わり代（なか）だ。アイランドカンパニーは未来を見据えて、地域への投資を惜しまない。現在、地域の至るところにベンチが設置されているが、これは誰かに頼まれた

わけではなく会社の売り上げで自発的に作ったものだ。かつてアコウの樹は経済先行の理由で姿を消した。同じことを繰り返さないために、自治体には頼らず自分たちの手でこの土地の豊かさを守ろうとしている。アイランドカンパニーの試みが、やがて日本が直面する問題解決の鍵を握る日がくるかもしれない。

離島のこれからを見据えて コミュニティ財団設立に尽力

山下さんの取り組みは、甌島の外にも広がり人と人を通じたネットワークができていく。現在、山下さんの肩書きは、アイランドカンパニーの代表取締役だけにとどまらず、5つの法人で取締役や役員を務める。さらに団体や地域での役職も合わせると、十指に余る。地域や業界を横断したプロジェクトに数多く参加する中で、思いや哲学を共にする仲間も増えた。その仲間たちと2019年に立ち上げたのが、鹿児島離島文化経済圏（以下、経済圏）である。南北600kmに広がる鹿児島島の海には、島特有の課題に向き合いながら奮闘している人たちがいる。山下さんはこれらの取り組みをつなぎ合わせるために、28の離島から有志を集い実践型コミュニティづくりに発起人として携

わっている。同じ海を挟んだ離島でも、規模も違えば経済基盤や成り立ちも異なる。そうした仲間たちの悩みや課題をディスカッションしながら、点ではなく面でつないでいく。そのために「ISLAND ZEBRA CONFERENCE」を24年に沖永良部島で開催した。フィールドワークで事例を発表しながら、島同士の理解を深めている。

離島にはあらゆる課題が山積する。ど

んなにやる気があっても夢を諦める理由はいくらでもある。「お金」「人」「技術」「経験」「知識」。ないものを挙げればきりが無い。しかし、せっかく始めた挑戦を諦めることがないように、経済圏では「かごしま島嶼ファンド設立準備室」を発足した。そのきっかけは、能登半島地震だった。大規模災害が起きるとメディアからの情報は限られてくる。必然的に離島への支援は後回しにされる。もし鹿児島島の島で同じようなことが起きたら、今までの苦労や夢が台無しになる。そんな思いを仲間が味わうことがないよう財団設立の機運が高まった。現在、財団設立の準備室では、使用金額の数%が自動的に寄付されるクレジットカードの発行やオフカーボンに取り組む企業への呼びかけなど、持続可能な支援のやり方を構想中である。環境、文化教育、産

業振興の3つをテーマに、活動支援の仲介だけにとどまらず、伴走しながら島の挑戦を育てていくコミュニティ財団の設立に向けた準備は着実に進んでいる。



山下さんは、小さい頃からじいちゃんたちの話を聞くのが好きで、田んぼや畑が遊び場だったという

島のために、仲間のために、未来のために走り続ける山下さん。甌島にいられるのは月に5日ほどで、落ち着く暇もなくあちこちを飛び回っている。どんなに多忙でも一つひとつのつながりを大切に、ありたい島の姿を追いつけている。それは、先人が築いた土壌の上に今の暮らしがあり、自分たちの活動が次の世代につながっていくからだ。人が減り経済が縮小しても、この島が暮らしたくなる場所であり続けるように、今日も魅力あふれる島の未来を描いている。

（福留 一郎、イースト朝日 稲毛 健人）

経済は夜動く

～ナイトタイムエコノミー最前線～

新型コロナウイルス拡大による各種制限等も終わり、外国人観光客（インバウンド）の増加や国内旅行なども活発化、観光は正常化に向かっている。一方で鹿児島県はコロナ禍前までの回復には至っておらず、消費拡大につながる手段の一つとして、夜間の経済活動（ナイトタイムエコノミー）への期待が高まる。現在の本県内の取り組みを紹介し、今後を展望する。

地域の資源に輝きを

～五社会 南薩視察記～



2025年7月、九州内の地方銀行系シンクタンク5社で構成される五社会の実務担当者会議を鹿児島県で行いました。今回は南薩地域で地域資源の活用に取り組んでいる3つの団体・個人を視察しました。3拠点のうち2つは以前当誌で取り上げた場所で、現在の状況を踏まえながら紹介します。



リバーバンク 森の学校

1

リバーバンク
(南九州市川辺町)

リバーバンクは地域課題解決のために組織された団体です。廃校を利用した「森の学校（旧長谷小学校）」や「タノカミステーション（旧川辺中学校）」の管理維持や地域の空き家再生などに取り組んでいます。当誌2022年5月号の「PEOPLE in Kagoshima」では同団体設立時の代表である坂口修一郎氏を紹介しました。「タノカミステーション」は現在着実に運営されており、



タノカミステーション

コワーキングスペースやサテライトオフィスなどビジネス面での利用だけでなく地元ヨガ教室などカルチャー面での利用もあります。また1階のレストランや菓子販売等で独立を目指す方を支援する「フードラボ」、誘致した企業によるクラフトビール工場でのビール製造・販売といった食に関する活動も進んでいます。

空き家再生では21軒の再生した空き家に県内外から46人が移住。その後、4人が移住後に生まれ、計50人が暮らすなど外部から人を呼び込み定着させる取り組みも着実に進んでいます。